

言語から見たベルリン・アカデミー、1746-66 年

有賀暢迪²

序：科学・アカデミー・「文芸共和国」

- ・科学アカデミーと「文芸共和国」：十八世紀のヨーロッパにおいて科学が行われた場
- ・「文芸共和国」の複数性

十八世紀初頭、^{レスプブリカ・リテラリア}「文芸共和国」はまだ生き続け、^{レピュブリック・デ・レトル}「文芸共和国」も卓越した地位を保ってはいた。しかし、それらのかたわらで、英語の「リパブリック・オヴ・ラーニング」、イタリア語の「レププブリカ・デイ・リッテラーティ」、ドイツ語の「ゲレールテンレプブリーク」といった組織が、いまや完全な市民権をもってヨーロッパの学問世界に所属していたのである³。

→ 「十八世紀のヨーロッパの科学」？

- ・ベルリン科学・文学アカデミー
(Académie Royale des Sciences et Belle-Lettres de Prusse) の事例：
フランス語、ラテン語、ドイツ語の三つの言語が共存

ベルリン・アカデミーの設立経緯

- ・王立科学協会 (Societas Regia Scientiarum)：アカデミーの前身、1711 年発足
→ 活動は不活発：約四十年間で七巻の論文集
- ・フリードリヒ二世 (1740 年即位) のアカデミー刷新計画
→ 外国から、モーペルテュイ (総裁) とオイラー (数学部門長) を招聘
- ・新文芸協会 (Nouvelle Société Littéraire)：自主的な学術団体、1743 年設立
→ 「哲学、数学、自然・世俗・文芸の歴史、批評のさまざまな分野」を対象とする
- ・二つの組織の統合
→ 1744 年：王立科学・文学アカデミー設立
→ 1746 年：モーペルテュイの総裁就任 (全権委譲)、最終的な体制が整う⁴
- ・会員の区分：名誉会員 (Honoraires)・正会員 (Ordinaires)・在外会員 (Etrangers)
- ・正会員は次の四つの部門のいずれかに属する：

¹ 2009 年 6 月 20 日 多摩美術大学

² 日本学術振興会特別研究員・京都大学大学院文学研究科博士後期課程
ariga.nobumichi@gmail.com

³ ポミアン『ヨーロッパとは何か』148 頁。

⁴ 特に断らない限り、以下の記述は 1746 年以降の体制についてのものである (四つの部門の名称など、44 年から若干の変更がある)。

実験哲学 (Philosophie Experimentale)

…「化学、解剖学、植物学、および経験に基づくあらゆる科学」

数学 (Mathematiques)

…「幾何学、代数学、力学、天文学、および抽象的な延長ないし数を対象とするあらゆる科学」

思弁哲学 (Philosophie Speculative)

…「論理学、形而上学、道徳科学」

文学 (Belles Lettres)

…「古典、歴史、言語」

共通語の交代：ラテン語からフランス語へ

- ・ 紀要 (論文集)：ラテン語 (科学協会) → フランス語 (アカデミー)
- ・ 初期のアカデミーにおけるフランス語重視の風潮
 - … 国王の意向もあるが、それだけではない
 - ユグノー系会員の存在⁵：特に新文芸協会で顕著 [表 1 左側参照]
 - Ex. フォルメ：紀要の編集責任者 (1748 年から終身幹事)
- ・ アカデミー紀要第 1 巻 (1745 年度；1746 年出版)
 - … 翻訳論文の割合が非常に高い [表 3 参照]
 - なぜわざわざフランス語で出版するのか？

[……] と言うのも、ラテン語の国境はみるみるうちに狭まってきており、代わってフランス語が今日ではほぼキケロの時代のギリシア語の立場にある。いたるところでそれが学ばれ、フランス語で書かれた書物が熱心に研究され、ドイツ人やイギリス人の出している良質な著作はみなこの言語に翻訳されている。要するにそれ [フランス語] が、ものごとにあの明瞭さと調子とを与え、注目を奪い、趣味を育む唯一のものだと思われるのだ⁶。

→ ラテン語に代わる、新しい「文芸共和国」の共通語としてのフランス語

- ・ 紀要の出版はその後もフランス語で続けられた
 - フランス語での出版を通じてヨーロッパ各地の学者たちとつながることができると考えていた限りにおいて、彼らは依然として単一の「文芸共和国」の中で研究活動を行っていた

アカデミーの会合における研究発表

- ・ ベルリン・アカデミーの会合

⁵ ここでは Grau を踏襲して、フランス語を話すプロテスタント一般を指して「ユグノー系」と呼んでいる (必ずしも、ベルリンのユグノー入植者の子孫とは限らない)。

⁶ Formey, "Préface," n.p.

定期会合：正会員中心、毎週木曜日の夕方4時～6時（休暇期間あり）

… 正会員による研究発表（論文の読み上げ）、在外会員やアカデミー外部の学者から届いた論文・書簡を読む、アカデミーに送られてきた書籍や発明品についての審査結果報告、新たな会員の選出、etc.

公開会合（Assemblée publique）：名誉会員など多くの賓客、年二回（一月と七月）

… 賓客などの演説、亡くなった会員の追悼文朗読、懸賞論文の選考結果発表、etc.

・議事録の分析

対象：正会員による研究発表；彼らは何語で発表を行っていたのか

範囲：1746年6月～66年7月（校訂出版されている範囲⁷）

※「ラテン語の論文」などと明記されている場合はその言語とし、そうでない場合は、議事録中に記された論文タイトルが何語で書かれているかを判別の基準とした。

・人物（発表者）による使用言語の相違 [表1 右側参照]

フランス語主体：エラー[1]⁸、ベグリン[31]、メリアン[39]、ズルツァー[41]など多数

ラテン語主体：古参の会員に多い；若手ではメッケル[37]、エピヌス[49]

ドイツ語主体：グレディシュ[5]、マルグラーフ[9]、ジュールスミルヒ[29]

・人物（発表者）による発表回数の相違

極端に多いオイラー[14]から、まったく研究発表をしていない会員まで、差が著しい

※正会員は毎年一つないし二つの論文を読むのが本来のルール

母国語の使用：ラテン語からドイツ語へ

・使用言語の比率の変遷 [表2 参照]

(1)アカデミー発足当初：仏が半分強、羅が半分弱、独はほとんどなし

・アカデミーの母体となった二つの組織の特徴、総裁モーペルテュイの存在

(2)1750年代：独が増加、羅が減少

・グレディシュ、マルグラーフ、ポット、キュスター：ラテン語→ドイツ語

… 共通語から母国語への移行

(3)1759-63年：独の比率がピークを迎える

・議事録の記載自体も変化：論文の表題自体がドイツ語で表記される

・モーペルテュイ没（1759年）、七年戦争、オイラーによるアカデミー統括

(4)1764年以降：仏の比率が圧倒的となる

・フリードリヒによるアカデミー会員人事への介入

… ベルヌーイ[54]、カスティヨン[55]、グイッチャール[56]、etc.

⁷ Winter, *Registres*. なお、議事録の内容自体はフランス語で書かれている。

⁸ 以下、[]で示した番号は、表1の各人名に対応する。

- ・ 出版された紀要における使用言語（翻訳論文）の比率 [表 3 参照]
 - ※ 紀要の表紙に書かれている年度、実際の出版年、論文がアカデミーの会合で読まれた年の三つが概して一致しないため、時系列が反映されない
 - … ただし、(2)の傾向はおぼろげながら確認できる
- ・ 研究発表と論文出版の関係について
 - … フランス語以外での発表が出版を困難にするわけでは必ずしもなかった
 - Ex. グレディシュ、マルグラーフ、ポット、メッケル / Cf. ジュースマルヒ

→ ベルリン・アカデミーにおける二重の言語状況：

紀要が共通語としてのフランス語で出版され続けていた一方で、研究発表の場では母国語であるドイツ語の使用が一般的になりつつあった

結論：「文芸共和国」の現実と理想

- ・ 「百科全書序論」（1751年）に見る「文芸共和国」の分裂と理想

フランス語が全ヨーロッパに広がった時点で、われわれはフランス語が、文芸復興以来、わが国の学者の言語であったラテン語にとってかわるべき時期がきていると考えた。[中略] われわれに範をとった他国の学者が、フランス語で書くより彼らの自国語で書く方がさらによく書けると信じたのは、理の当然であった。そこでイギリスはわれわれを模倣した。ラテン語の避難所を思わせたドイツも、知らず知らずのあいだにラテン語の使用をやめはじめている。スウェーデン人、デンマーク人、ロシア人もやがてドイツのあとに従うであろうことは、疑いえないところである⁹。

[...] 哲学の著作では、明晰さと正確さがすべての価値基準となるべきであって、約束による一つの世界言語しか必要でないのである¹⁰。

- ・ ベルリン・アカデミーにおける二重の言語状況（再）
 - 研究発表の場：ラテン語→ドイツ語 i.e. 共通語→母国語
 - 紀要：単一の共通語（フランス語）という理想の保持
 - Ex. 1784年の懸賞論文課題「フランス語の普遍性」

→ 「十八世紀のヨーロッパ」の特色：

現実の学問研究がそれぞれの母国語で行われつつあったとしても、それと並行して、単一の「文芸共和国」という理想が生き続けていた

※ この両面から十八世紀ヨーロッパ科学史を記述することの必要性

⁹ ダランベール「百科全書序論」496-497頁。

¹⁰ 同、497頁。

関連年表

1700年7月	科学協会設立の認可状
1711年1月	王立科学協会の創立式典（正式な発足）
1713年2月	フリードリヒ＝ヴィルヘルム一世即位
1740年5月	フリードリヒ二世即位
1740年12月	プロイセン、シュレージエンに侵攻（オーストリアとの戦争開始）
1743年8月	新文芸協会発足
1743年11月	フリードリヒ二世、二つの組織の統合を検討する委員会を発足させる
1744年1月	王立科学・文学アカデミーの創立式典
1745年7月	アカデミーの会合にて、紀要をフランス語で出版することが決定
1745年12月	ドレスデンの和議（オーストリアとの戦争終結）
1746年6月	アカデミーの新しい規程の発効；モーペルテュイ、総裁に就任
1748年5月	フォルメ、終身幹事に就任
1756年8月	プロイセン、ザクセンに侵攻（七年戦争開始）
1759年7月	モーペルテュイ没
1763年2月	フベルトゥスブルク条約（七年戦争終結）
1763年12月	フリードリヒ二世、初めて自らアカデミーの新会員を推挙
1782年6月	アカデミー、84年の懸賞論文の課題に「フランス語の普遍性」を問う
1786年8月	フリードリヒ二世没
1788年	この年度の分から、紀要がフランス語とドイツ語に分けて編集される
1804年	この年度の分から、紀要がドイツ語のみで編集される

参考文献

Hans Aarsleff, "The Berlin academy under Frederick the Great," *History of the Human Sciences*, vol. 2 (1989), pp. 193-206.

Jean Le Rond d'Alembert [ダランベール]「百科全書序論」（佐々木康之訳），串田孫一責任編集『世界の名著 29：ヴォルテール デイドロ ダランベール』（東京：中央公論社，1970年）415-528頁．

Lorraine Daston, "The ideal and reality of the Republic of Letters in the Enlightenment," *Science in Context*, vol. 4 (1991), pp. 367-386.

Emil Alfred Fellmann [E.A. フェルマン]『オイラー：その生涯と業績』（山本敦之訳）東京：シュプリンガー・フェアラーク東京，2002年．

Jean Henri Samuel Formey, "Préface" à *Histoire de l'académie royale des sciences et belles lettres de Berlin. Année 1745*, n.p. Berlin: Ambroise Haude, 1746.

----, *Histoire de l'académie royale des sciences et belles lettres, depuis son origine*

jusqu'à présent. Berlin: Haude et Spener, 1750; 1752 [二つの版あり].
 ----, *Souvenir d'un citoyen*, 2 tomes. Berlin: François de La Garde, 1789.
 Conrad Grau, "Die Berliner Akademie der Wissenschaften und die Hugenotten." In
Hugenotten in Berlin, hg. Gottfried Bregulla, S. 327-362. Berlin: Nicolai, 1988.
 Adolf Harnack, *Geschichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften
 zu Berlin*, 3 Bände. Berlin: Reichsdruckerei, 1900.
 James E. McClellan III, *Science reorganized: Scientific societies in the eighteenth
 century*, New York: Columbia University Press, 1985.
 Krzysztof Pomian [クシトフ・ポミアン]『増補 ヨーロッパとは何か: 分裂と統合の 1500
 年』(松村剛訳) 平凡社ライブラリー, 東京: 平凡社, 2002 年.
 齊藤渉「『知識人共和国』は何語で話すか: プロイセンの啓蒙主義とフランス系入植者(前・
 後編)」『ドイツ啓蒙主義歴史学研究 5』(大阪大学大学院言語文化研究科, 2005 年),
 17-21 頁および『ドイツ啓蒙主義歴史学研究 6』(同, 2006 年), 29-35 頁.
 Mary Terrall, *The man who flattened the Earth: Maupertuis and the sciences in the
 Enlightenment*, Chicago: The University of Chicago Press, 2002.
 Ann Thomson, "Formey, Jean Henri (1711-1797)." In *Dictionnaire des journalistes:
 1600-1789*, sous la direction de Jean Sgard, p. 402-406. Oxford: Voltaire
 Foundation, 1999.
 Eduard Winter hg. (in Verbindung mit Maria Winter), *Die Registres der Berliner
 Akademie der Wissenschaften 1746-1766 : Dokumente für das Wirken Leonhard
 Eulers in Berlin zum 250. Geburtstag*, Berlin: Akademie-Verlag, 1957.

※ベルリン・アカデミーの紀要や関連する書籍などは、その後継団体であるベルリン＝ブ
 ランデンブルク科学アカデミーの電子図書館にて閲覧可能。

<http://bibliothek.bbaw.de/bibliothek-digital> (2009 年 6 月 10 日現在)

<報告者について(補足)>

専門は、力学を中心とした物理学・数理科学の歴史。特に、十八世紀のヨーロッパにおける力
 学の展開とその思想的・文化的背景を主な研究の対象とする。

(論文など)

「モーペルテュイの作用, オイラーの労力: 十八世紀中葉における二つの最小作用の原理」
 『科学史研究』第 48 卷(2009 年)掲載予定。

「活力論争とは何だったのか」『科学哲学科学史研究』第 3 号(京都大学文学部科学哲学科
 科学史研究室, 2009 年), 39-57 頁。

etc.